

令和元年度 金沢ベーシックカリキュラム実践推進事業 報告書

学校名	研究課題	研究手法
鞍月小学校	防災教育	独自カリキュラムの開発・小中連携

1 研究の重点と具体的な取組

(1) 重点1 学年に応じた「防災教育」を教科や学活等に位置づける

本校では、年間カリキュラム中の教科や学活等に防災教育を位置づけ、学年ごとに授業実践を行う。その際、授業は公開とし、可能な限り参観する。また、その成果や課題を学年主任会で報告し、改善点を次年度に生かせるようファイリングを行う。

(2) 重点2 小中連携での避難訓練や各校での実践報告会を行う

夏季休業中に、小中の各担当者を中心に内容を検討し、小中連携の実践報告会や避難訓練を実施する。

小中合同訓練においては、担当での相談を重ね、より実際の避難の場を想定した訓練となるよう内容の向上を図る。

2 取組の検証

重点1

(1) 年間カリキュラムの位置づけ

防災教育のカリキュラムを教科及び学活に位置づけ実践した(図1)。実践は学年単位で行い、整理会で実践の振り返りも行った。取組を通して児童は避難の大切さなどを改めて認識し、適切な避難方法について考えることもできるようになってきた。

学年	学活の内容	教科・単元
1年	避難のしかた	生活科・がっこうだいすき
2年	いかのおすし	生活科・どきどきわくわくまちたんけん
3年	地震がおきたら	理科・太陽の光を調べよう
4年	火事が起きたら	社会科・あんしんしてくらせるまちに
5年	洪水から身を守るには	社会科・社会を変える情報
6年	津波から逃げる	体育科・クロール・平泳ぎ

図1 今年度の実践

(2) 授業実践例 2年生活科「どきどきわくわくまちたんけん」より

①取組の実際(課題をつかむ)

こわい人に会った時、危ない、あやしいと思った時は「いかのおすし」で逃げるということを確かめた。また、どこに逃げればよいかについても考えさせた。その後、追いかけてきたり、家まで遠かったりする時はどうすればよいかという課題を設定した。

②取組の実際(課題について話し合う)

みんながこわい思いをした時に逃げ込むための子ども110番の家という存在があることを知らせ、看板を見せると、見たことがある気がする児童と、見覚えがないという児童に分かれた。これからの町探検でどんな場所が子ども110番の家になっているか確かめて、もしもの時に自分の身をまもれるようにしようということを確認した。

③取組の実際(実際に町探検で子ども110番の家の場所を確かめる)

実際に町探検をして110番の家をたしかめた。

④取組の実際（振り返りをする）

学習を通して学んだこと、考えたこと、感じたことなどについて振り返りカードに記入した。また、自分の通学路の帰り道にも子ども110番の家がないか確かめるといざという時の安心につながるという思いも持たせることができた。



図2 110番の家をたしかめる児童

重点2

(1) 小中連携での避難訓練

3校合同で実施していた避難訓練と、地域の防災会が実施していた防災訓練と内容に違いがあった。そこで、実際は地域の防災会が運営をすることが現実的なため、3校合同の避難訓練を廃止し、地域の防災訓練に一本化することにした。

(2) 実践報告会

3校でそれぞれが実施した防災教育についての実践報告会を行った。港中学校と栗崎小学校からはそれぞれの年間を通した避難訓練について、鞍月小学校からは6年生の着衣水泳についての授業実践を報告した。港中学校には親への引き渡し訓練のノウハウがないようで、小学校のノウハウを伝えることができた。また、着衣水泳の実践報告では、目的は「着衣して泳ぎづらいことを知ること」ではなく、「泳ぎづらい状況で自分の命を守るためにはどう判断して行動すべきなのかということを知ること」だということを再認識した。

3 成果と課題

(1) 成果

- ・防災教育の実践を積み重ねることができた。
- ・小中連携の実践報告会で避難訓練の手立てを共通理解することができた。

(2) 課題

- ・防災教育の実践に教科や単元でのかたよりが見られる。より幅広い視点でのカリキュラム開発が必要である。